琉球大学学術リポジトリ

# 自閉症児のコミュニケーション指導に関する研究



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 神園幸郎<br>公開日: 2009-03-06<br>キーワード (Ja): 自閉症, 愛着, コミュニケーション, 情動, 対人関係, 鏡像反応<br>キーワード (En): autistic children, communication, emotion, interpersonal relatedness, mirror response<br>作成者: 神園, 幸郎, Kamizono, Sachiro<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/9107 |

# 自閉症児のコミュニケーション指導に関する研究

(課題番号　10610130)

平成10年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）

研　究　成　果　報　告　書

平成14年３月

幸　郎
琉球大学附属図書館　教育学部教授)

0020024006843

# はしがき

本報告書は10年度から平成13年度の4年間にわたり「自閉症児のコミュニケーション指導に関する研究」を課題として、科学研究費補助金（一般研究(C)）の助成を得て実施された研究の成果をまとめたものである。

研究組織

研究代表者　：　神　園　幸　郎　（琉球大学教育学部教授）

交付決定額（配分額）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 平成10年度 | 1，300 | 0 | 1，300 |
| 平成11年度 | 500 | 0 | 500 |
| 平成12年度 | 500 | 0 | 500 |
| 平成13年度 | 600 | 0 | 600 |
| 総計 | 2，900 | 0 | 2，900 |

研究発表

（1）　学会誌等

神園幸郎，自閉症児の発達に及ぼす母親の意識変革の影響，琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，第1号，1999年10月.

神園幸郎，自閉症児における愛着の形成過程　－　母親以外の特定の他者との関係において　－，琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，第2号，2000年3月.

神園幸郎，自閉症児にみられる対人関係の逆転現象，琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，第3号，2001年3月.

神園幸郎，自閉症児における対人関係の変遷と鏡像反応の関連について，琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要，第4号，印刷中.

（2） 学会発表

神園幸郎，自閉症児の表現活動を促す試み，日本発達心理学会第 10 回大会、1999 年 3 月.

神園幸郎，自閉症児の母子相互交流に及ぼす母親の意識の影響，日本特殊教育学会第 37 回大会，1999 年 9 月.

神園幸郎，自閉性障害児にみられる対人関係の逆転現象，日本特殊教育学会第 38 回大会，2000 年 9 月.

# 研　究　成　果　報　告

目　次

１．　はじめに

２．　研究１：自閉症児の発達に及ぼす母親の意識変革の影響

３．　研究２：自閉症児における愛着の形成過程
　　－　母親以外の特定の他者との関係において　－

４．　研究３：自閉症児にみられる対人関係の逆転現象

５．　研究４：自閉症児における対人関係の変遷と鏡像反応の関連について

# はじめに

自閉症児の中でもWingの類型によるpassive typeとactive but odd typeの自閉症児においては、言語の使用が可能である。しかしながら、彼らの言語はコミュニケーションのための媒体として機能するには大きな制約がある。つまり、保護者や障害児保育の担当保育士などきわめて近い関係にある他者との閉じた二者関係のなかで、その関係だけに通用する特殊な形態でしかやり取りが成立しないのである。彼らの言語はいわゆる、他者関係に特異的なコミュニケーション媒体と言うことができる。こうした彼らのコミュニケーション・スタイルを多様な他者との関係に開いた通常の様式へと導くための指導が望まれている。

筆者は自閉症児にみられる身体の姿勢や運動・動作の「ぎこちなさ」を収集・整理し，身体は内的世界を表す表現の媒体であり，彼らの示す「ぎこちなさ」は自己身体の認識や彼らを取り巻く世界の認識上の特異性を反映しているとの結論を得た．自閉症児は自己身体を「自己の身体」として対象化・客体化して捉えることに困難を抱えているため，例えば，自己の鏡映像に対して極めて特異な反応を示すことが多い． 注意の障害を持ち，かつ他者への関心が薄い自閉症児でも，自己身体と連動して動く自己の鏡映像に対しては敏感に反応し，それに対して特有な忌避や恐怖反応を示した．この現象はLacanの言う「鏡像段階」において見られるものであり，自己の鏡映像を「奇妙な他者」や「分身」として捉えることによって出現する．生身の他者に対しては決して出現しない行動が，鏡映像で他者に対峙した時には極めて自然に生起する．つまり，実世界では成立しない行動が，鏡映像としての「分身」に自己の意図を託することで行動が実現するのである．臨床的にはこうした現象は鏡映像に限らず，例えば意図を投影する媒体として指人形などを使うことでコミュニケーションが改善するといった事実がある．これらの臨床的な事実から，自閉症児は自己身体の姿勢や運動・動作と連動するものに対して，自らの意図を投影する傾向があるものと思われる．こうした彼らの特性を有効に利用することによって，多様な他者に開かれたコミュニケーションを促進させることができる可能性が想定できる．

ところで、自閉症の中核症状である社会性障害の本態を探る研究の流れの１つに自閉症児の愛着に関する研究がある。Ainsworthらによって開発されたストレンジ・シチュエーション法によって自閉症児の愛着行動を調べた従来の研究によれば、精神年齢が２歳前後の自閉症児は、養育者との分離後、および再会後のいずれにおいても、見知らぬ人（ストレンジャー）よりも養育者に接近・探索行動を示した。こうした結果から、自閉症児も養育者を見知らぬ他者とは区別し、愛着を形成することができることが明らかになった。自閉症児における愛着行動の存在が相次いで報告されるなかで、自閉症児の親たちが自閉症のわが子に対していだいている感触は、こうした研究の知見とは大きくかけ離れたものであった。つまり、自閉症児が示す愛着の様相は、健常児のそれとは明らかに異なっており、こうした事実が親たちの違和感を生み出していると思われる。おそらく、愛着対象への接

近・探索の量を尺度としているストレンジ・シチュエーション法では捉えられない愛着の質的な側面が存在するのであろう。先に指摘したような特定の他者との二者関係に閉じた自閉症児のコミュニケーションの特異性も、こうした他者関係の質的側面を反映していることが十分に考えられる。自閉症児のコミュニケーションを考える上で、他者との関係性の形成過程を質的に把握する必要がある。

そこで、本研究では第一に自閉症児と他者との愛着に基づく関係性がどのような経緯で形成されるかを明らかにし、その形成過程に照らして自閉症児のコミュニケーションの特徴を発達的に検討する。第二に、日常的な遊び場面において自閉症児が示す鏡像反応と、他者との関係性の変遷との関連を検討することによって、特定の他者との二者関係に閉じた自閉症児のコミュニケーションを多様な他者に開かれたものにするために、鏡が果たす役割を展望する。

上記の目的を達成するために、本研究は以下に示した４つの研究から構成された。

研究１は、二者関係閉じた自閉症児のコミュニケーション・スタイルがどのような経緯で形成されるのかを明らかにするために、自閉症児の母子関係について縦断的な観察を行った。乳幼児期における母子のコミュニケーションにとって母親の関わり方はきわめて重要な役割をもっている。母親がこどもの行動から間主観的に何を感じ取り、どのように関わるかは、母親の「こども観」「障害観」といった主観性によって規定されている。したがって、母子の関係性の質的な変節は母親の意識の変化に負うところが大きい。そこで、母親の意識の変革がどのような経験を契機として生起し、そのことが母子の関係性，引いては自閉症児のコミュニケーションにどのような影響を及ぼすかについて検討した。

研究２においては、母親以外の他者との愛着の形成過程を解明するために、特定の他者との半統制的な交流場面を設定し、前方視的な観察を行った。従来から母子関係と母親以外の他者関係とを連続するものとみなすかどうかについては議論のあるところであるが、心的世界を有する存在としての他者理解を促し、自閉症児の社会性障害を改善に導くためには、母子関係を調整するだけでは十分ではない。母親以外の特定の他者との愛着関係を形成することが必要であると思われる。そこで、研究２では母親以外の特定の他者への愛着の形成を前方視的に追跡し、愛着の変容過程を明らかにした。また、自閉症児に特有な関係特殊的な自己表現活動を複数の他者に開くための方法についても、ある種の試みを行った。

研究３では臨床場面でしばしば観察される自閉症児の対人関係における「逆転現象」に注目して、その起源について検討した。この現象は、先に指摘したような特定の他者との間の閉じた関係の中でしかコミュニケーションが成立せず、他の関係に広がらないというだけではなく、新たな関係が形成されるとそれまでに成立していた良好な関係が希薄になり、元に戻ってしまうというものである。まさに新たな関係がそれまでの関係に取って代わる、すなわち、関係が逆転してしまうのである。この現象は筆者が関わった自閉症幼児の臨床場面においてたびたび観察された。対人関係の「逆転現象」は先に指摘したような

自閉症児の親が実感している自閉症児特有な愛着の様相、そして前述した二者関係が他の関係に広がらないという現象をも包含しているとみることができる。そうすると、関係性の「逆転現象」を詳細に分析することを通して、自閉症児の対人関係の質的な特異性を明らかにし、中核症状としての社会性障害の本態に迫ることができるかもしれない。そこで、研究３では関係性の「逆転現象」を詳細に分析することによって、自閉症児の社会性障害の起源について検討した。

最後に、研究４は自閉症児と養育者の遊び場面の前方視的観察を通して、対人関係の発達変化と鏡像反応の特徴を調べた。まず、自閉症児とその養育者との相互交流場面における両者の行動の観察をとおして、愛着関係の質的変遷について前方視的に追跡した。そして、自閉症児と養育者との交流場面で出現した自閉症児の鏡像反応について、自己認知の水準を想定しつつ、顔面だけに焦点化しない，より全般的な鏡像反応についてその特徴を明らかにした。その上で、自閉症児と養育者との愛着関係の質的な変遷と鏡像反応の特徴との関連性を検討することによって、自閉症児が示す鏡像反応の意味を検討した。

研究１：　自閉症児の発達に及ぼす母親の意識変革の影響

研究２：　自閉症児における愛着の形成過程
　　―　母親以外の特定の他者との関係において　―

研究３：　自閉症児にみられる対人関係の逆転現象

研究４：　自閉症児における対人関係の変遷と鏡像反応の関連について